

白鳥伝説と仏陀

本田 清

950-0123 新潟市江南区亀田水道町4-7-12

この論文は中外日報創刊百十周年記念事業で精神文化がテーマの論文作品を募集した第三回「涙骨賞」受賞作品で、著者の了解を得て、本誌に再掲することにした。

雄大な渡りをする白鳥を追って四十年、日本列島はもとより、世界中の白鳥渡来地を渡り歩いてきた。この長い旅路のなかで気付かされたことがある。洋の東西を問わず多くの民族は、呼べば応える山彦のように互いに共鳴する「白鳥伝説」を生み出していたのである。そのひとつが仏教美術の飛天の姿と重なる「羽衣伝説」の物語であった。

これらの伝説の主の天女は、白鳥の化身なのだと伝えられてきたが、その成り立ちの謎を探りたいと願った。解く鍵は西域にあると直感して、めざしたのは中国西域・天山山脈に棲む白鳥であり、仏教石窟で見られる白鳥の壁画や飛天像の数々であった。しかし、その検証と解明の道は文明の十字路を越え、遠くインド古代文学のリグ・ヴェーダやジャータカにいう仏陀の世界へとつながっていた。

一. 羽衣伝説の白鳥

羽衣伝説は、一人の漁師と天女のロマンスの果てに、別離の哀感が待つという波乱の物語である。

この物語は、駿河、河内、近江、丹後、常陸、伊勢、琉球の風土記やその逸文などに大同小異の文脈で残されていたが、室町時代に謡曲「羽衣」として簡潔に要約され、以降、能舞台で演じ続けられてきたことから、日本の羽衣伝説を代表する作品となった。

しかし、羽衣伝説は、「白鳥処女説話」を源とする物語であり、奥行きは深く、幅も広いものである。その振幅の一端を知るために、日本の近江風土記にある「余呉の湖の白鳥伝説」と、朝鮮半島に残る「金剛山の池の天女の話」とをくらべてみよう。

まず、余呉の湖の白鳥伝説だが、およそ次のような展開をみせ、朝鮮半島とのつながりを感じさせる。

古老の言い伝えをだどってみる。

「近江国伊香郡与呉の里の湖に、ある日、八人の天女が降りてきて白鳥になり、湖

の南の方で水浴をしていました。これを西山の方から伊香刀美という男が見ていて『珍しい姿をした白鳥だ、これは神のお使いの天女ではないか』を思っただけで近くまで行って見ると、本当に天女でした。伊香刀美は感激し、そこを立ち去ることができなくなり、興味が高じるままに、こっそりと白い愛犬を放って、天女の末妹の羽衣をかすめ取らせました。これを見た姉の七人の天女は一斉に飛昇してしまいました。末妹だけは天の道が塞がれたので飛び去ることができず、やむをえず水浴をしていた神浦という浜で伊香刀美の妻になり、ついに男子二人女子二人を産み育てることになりました。兄の名はオミシル、弟の名はナシトミ、女の子の名はイセリヒメ、ナセリヒメとって、この人たちが伊香連の先祖だといわれています。

母になった天女は、その後、羽衣をさがし出して、それを身につけて天に昇ってしまいました。独りになった伊香刀美は空床を守り、毎日、昔の歌ばかり歌っていたということです」となる。

ここでは、天女の白鳥と漁師の結婚、羽衣を盗んだ白犬、伊香連と四人の子供の話などが目をひくが、天に帰れなくなった天女が、結婚して子供を育てたあとに昇天するという筋書きに関していえば、多々ある白鳥処女説話の主流を占めるストーリーなのである。

右の説話のなかで、天女の子らが、伊香連の祖であるとされているのは、伊香連の祖先が中臣氏であったこと、この中臣氏は、新羅系の移住者であったとも伝えられることから推しはかれば、この羽衣伝説は、朝鮮半島から伝えられたものなのかもしれない。

その朝鮮では、羽衣伝説は木こりの語る「金剛山の池の天女の話」として伝わっている。この物語では、木こりと天女との間に子供が三人いた

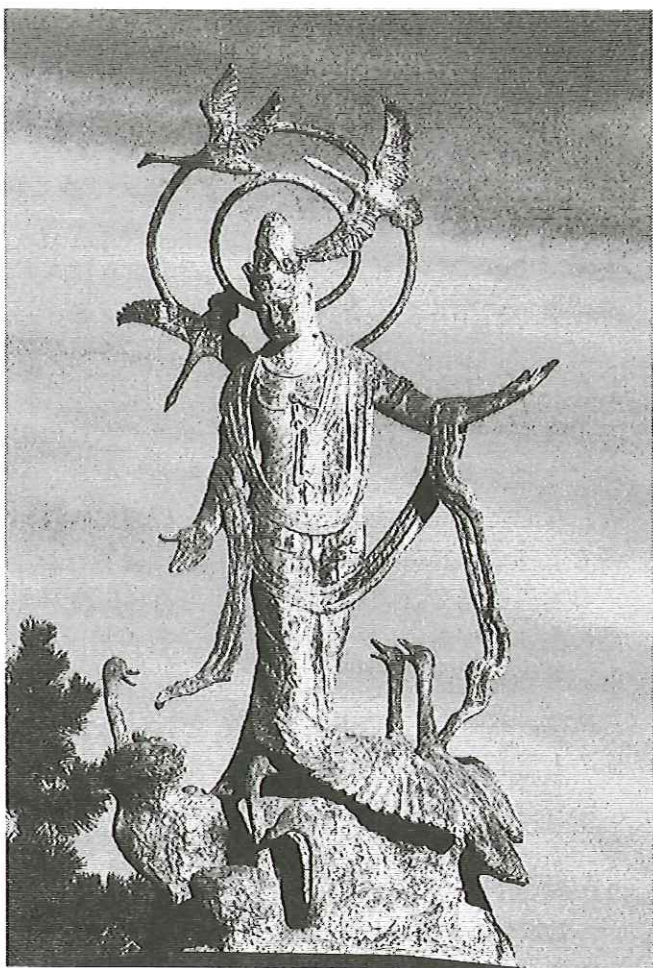


図1. 白鳥観音像。鹿島灘を望む牟田市(旧白鳥村)に建立されている故橋本活道作。私の写真集「ハクチョウ・日本の冬に生きる」(平凡社刊)を参考に製作されたとのことである。

が、天女が羽衣を見つけて昇天するのとき、両脇に二人の子供をかかえ、もう一人の子供は股の間にはさんで天井を破って天に昇ってしまった、という話になっている。

木こりは嘆き悲しみ、毎日のように金剛山の池に通っていたが、ある日、天から大きな釣瓶が下がってきたので、それに飛び乗ると、天へ昇ることができ、妻子に再会できたという。だがこの話はめでたしめでたしでは終わらなかった。

「しばらくすると木こりは、下界に残してきた老母に会いたくなって、天馬にまたがり母屋に降りてきたが、『決して地上に足をつけてはいけません』と言いふくめられてきた天女の妻との約束ごとそ思い出し、折角老母が作ってくれた大好きな煮物を、馬上で食べるはめになったが、その熱い手料理を馬の背にこぼしてしまい、驚いた天馬に振り落とされ、そのまま地上に残されてしまった」というなんとも情けないお話で、やはり結末は別離なのである。

以上のように、羽衣伝説は、天女との婚姻すなわち神婚伝説といわれるスタイルをとるものが多いが、なかには婚姻を媒体とせず、天女を養女として育てる話に転化しているものもある。たとえば、かぐや姫などの昔話である。

かぐや姫の場合は、天女のかぐや姫を迎えるため、天から降りてきた輿に向けて大勢の軍勢が出てきて、いっせいに弓矢を放ち撃退しようとするのだが、雷神の強烈な怒りの電光に妨げられ失敗してしまふ。あとにとり残されたのは、かぐや姫を慈しみ育てた老夫婦だけであった。

こうしてみると、羽衣伝説の思想を受け継ぐ謡曲の羽衣の舞い姿には、愛別離苦。会者定離の現場に直面した天女の、うめきと苦しみ、そして伸吟してやまぬ深層心理が暗示されていると思われ、とどのつまりは人の世はなべて無常なのだという現世の真実を、いみじくも表現しているかにみえる。

二. インドの白鳥伝説

近江風土記によれば、羽衣の天女は、白鳥の化身の姿である。つまり菩薩の眷属とみなされる天女が、鳥類である白鳥に、化身したということになる。この奇怪な現象を、なぜだと問い詰めてみても答えは出てこない。解明への道は、やはり異次元の物語としての説話(神話、伝説、仏典)に依るしかないだろう。

日本に神話では、ヤマトタケルの白鳥伝説が著名である。英雄のヤマトタケルが伊勢の能煩野で命絶えたときに、「巨大な白鳥に変身して飛び去った」(日本書記、702年)という物語りになっている。とするならば八世紀初頭、この物語を書き残した文人たちには、形而上、すでに仏教がもたらしたであろう輪廻転生の思想が受容されていたものと思われる。

仏教は、インドに起こり、中国、朝鮮を経て日本に伝えられたといわれる。この仏教の源流をたどると、インドのヒンドゥー教にいきつく。その時代、インドのヒンドゥー教を支配していたのは、数多(あまた)のバラモン僧による派閥連合だといわれるが、輪廻転生の思想は、僧(バラモン)、王族、庶民、隷族と四性に区分されたカースト制の、苦悩の渦のなかから自然に派生し、多くの民衆が共有していた上昇思想だっ

たのではなからうか。

この転生と化身の思想の差は紙一重であって、壮大な宗教叙事詩といわれるインドのリグ・ヴェーダにその根元があると思われる。

ヴェーダに登場する神々は強大で、宇宙の広大な無辺の領域を支配する神と、地上のすべての事象を支配する神が存在するが、それぞれの神が得意とする分野を受け持っている。だが、とき至れば化身の術を行使して、相手側の領域に入り込むことにたくみである。

ヒンドゥーの三大神のなかの一方のヴィシュヌ神は、ラーマという英雄に化身して、戦いの相手のラヴァナ(魔神)を屈服させたり、あるいはクリシュナというハンサムな青年に乗り移って魅惑的な笛を吹き、その音色に誘われて集まってきた娘たちの衣を取り上げては裸にし、水の中や樹の上で戯れたりと好き勝手に振る舞う。この点は、天女の衣を奪って自由を束縛し、妻にしていたという羽衣伝説を連想させる。

ヒンドゥー教の神々は、人間に化身するだけではなく、鳥類や魚などの動物に化身することもできる。化身した動物は化身前の神と同一の存在であるとされ、ヴェーダの中では神格をもつトリやサカナやサルやゾウなどが活躍する。この思想には、戦死した特攻隊員の亡霊が「ホタルになって帰ってきた」と信じることのできる日本人の感性にも通底する普遍性がある。

ヴェーダには、ナーヤナの化身という物語がある。ここでは、ヴィシュヌ神が、六種ないしは十種もの動物や人間に化身する話が述べられている。すなわち、白鳥(ハンサ) 亀(クールマ) 魚(マストヤ) 猪(ヴァラーハ) 人獅子(ヌリシンハ) 小人(ヴァーマナ) パラシュラーマ・ラーマ(英雄) カルキン(英雄) ブッダ(仏陀) である。

要するに白鳥も仏陀もヴィシュヌ神の化身なのである。

この仏陀は、ヴェーダの教義に反して誤った指導者であったとして、こともあろうにヴィシュヌ神がその仏陀に化身し、仏教そのものを退治してしまったとされている。これがヒンドゥーの仏陀観なのである。

さて、ヒンドゥーの神話のなかで、アプサラス(Apsaras, インド民間信仰上の妖精で、ガンダルヴァの愛人。西洋神話のニンフに相当する。雲、星、電光、水辺にかかわり、水鳥に化身することもある。その妖艶な媚態で聖者を誘惑して苦行を妨げることもある。インドで「アプサラ」といっている。)やガンダルヴァが水鳥に化身したり人魚に変身したりして活躍する場面があるが、この物語を「白鳥が人間に変身し人間と婚姻するが、やがて時を経て天界に戻る」という羽衣伝説(白鳥処女説話)との間に、何らかの関係はないのだろうか。

ヴェーダには「プルーラヴァス王とウルヴァシー精女(アプサラ)との対話」という物語がある。ヴェーダ文学(辻直四郎訳・筑摩書房)によると、

「アプサラは、言い寄ってきたプルーラヴァス王に対し、王が裸のまま彼女の前に現れないことを条件に同棲し、アプサラは王子を身ごもった。地上での生活が長引くにつれ、ガンダルヴァは、アプサラを天上に呼び戻すために一計を案じ、まず彼女が大切に育てていた子羊を奪った。プルーラヴァス王は、これを奪回しようと、素っ裸

のまま外に踊り出てきた。天のガンダルヴァは、このときとばかりに強烈な電光をひらめかして王の裸体の全てを露にした。それを見たアプサラは雲の中に姿を隠してしまった」

「アプサラに恋い焦がれていた、プルーラヴァス王はある日、蓮池の水面でアプサラが白鳥(ハンサ)に変身して遊んでいるのを発見した。王はもう一度一緒に住んでくれるよう言葉をつくして懇願したのだが……」

対話というのは、ここで途切れて終わりということがなく、堂々めぐりなのである。しかし、白鳥処女説話のエッセンスである「天女と地上の男との婚姻」という因子と「天女が水辺で白鳥に化身する」という因子のほか、結末として「天女が天界に戻る」という意味も十分に含まれている。ここに至って私は、このヴェーダのアプサラの物語こそ「羽衣伝説」の祖形のひとつであると確信したのである。

三. 罌に掛かった白鳥の王

ジャータカに“白鳥本生”という物語がある。釈尊の前生は、菩薩行に励む白鳥の王様であったというドラマチックなお話である。

『ジャータカ全集』(春秋社刊)には、釈尊の本生譚(前生の物語)が三百二十余話もあり、この中で“白鳥本生”は田辺和子訳で一万三千字に及ぶ長文になっている。大意は、次のようなものである。

「釈尊(菩薩)は、かつてマーサナ大湖の白鳥の大群の王であった。王にはスムカ(美貌という意味)という名の将軍がついていた。白鳥たちはこの二羽に守られて、大湖の水面は最高の美しさで輝き、澄みきった空の青さを凌駕するかのようであった。王の身体は白鳥の姿をしていたが、徳の威光により黄金の白鳥のように見えた。

この名声を聞きつけたベナレスのブラマダグダという人間の王が、白鳥の王を自国に呼び寄せたいと思った。このことを大臣に相談すると、大臣たちは、『マーサナ大湖に負けないすばらしい湖をつくって施無畏(安全保障)すれば、白鳥の王と将軍を引き寄せることができるでしょう』といったので、『そうしよう』といってブラマダグダ王は大きな池を造らせた。やがてその池には紅蓮華、青蓮華や月の出とともに咲く白蓮華、日中に咲く睡蓮などが咲きみだれ、馥郁たる芳香に引き寄せられて蜜蜂が群れるほどになり、湖の水面は、お月さまとその妻たちが共有する鏡の如くであった。王はこの池に施無畏をつけて鳥たちに開放した。

マーサナ大湖から早速白鳥のつがいベナレスの池にやってきた。この白鳥は、ほしきままに時を過ごしてから、季節の変わり目になったのでベナレスを飛び去ってマーサナ大湖に戻った。

白鳥のつがいが、ベナレスの美しい蓮の池で楽しく遊んできたことを仲間たちに話すと、みんなは、そこへ行ってみたいと言い合った。

これを耳にした白鳥の王は、将軍のスムカに、『お前は どう思うかね』といった。そこでスムカは答えた。『私どもの大湖に欠けているものは何ひとつありません。王様まで、そこへ行くのはふさわしくないとします。人間の造った池には見せかけと

裏の心が隠されているのです。行くのはやめてください』といった。

しかし、ベナレスの蓮池に行ってみたいと要求する白鳥の群れが大多数となったので、王はそれに同意し、スムカを先頭に数十万の白鳥の大群を引き連れ、月光を映して光るベナレスの湖水に次々を舞い降りた」

説話は続く。

「ベナレスの王は、大喜びであったが、湖の中に白鳥の大群を従えて、黄金のように輝くひとときわ大型の二羽の白鳥がいることを認めると、これを捕らえたいと思った。王は獵師を呼んで、罾を仕掛けるように命じた。

ある日、白鳥の王は、この罾に片脚を掛けられてしまった。これを見て驚いた白鳥の大群は羽音を轟かして一斉に飛び去った。だが、將軍のスムカだけは王(菩薩)のそばから決して離れようとしなかった。

王は言った。『スムカよ、行け。白鳥の仲間たちのもとへ！』

スムカは答えた。『私がここを去っても、不老不死があるわけもなでしょう。不幸に陥った王様をどうして見捨てられましようか』

王は言った『お前が生命を捨てようとして、何の利益があるというのか』

スムカは『白鳥たちの国の最高の法を身につけられた王様を信じ、愛するが故に、私は王様、貴方さまと同じものを受け入れます』と言った。

そのとき、白鳥が罾に掛かっているのを見て獵師がやってきた。獵師は、罾にかかっている白鳥のそばに、逃げようとしないうもう一羽の大きな白鳥がいるのを認めたので『お前は、自由なのになぜ逃げないのか』と言った。

『もし貴方がたが一羽で満足するなら、その一羽を放し、身丈も同じ私を捕らえてください』とスムカは申し出た」

話は、このように推移するのだが、この物語を残した古代のインド人は、白鳥の生態を生態をよく知っていた人たちだったと思う。

なぜならば、白鳥は、広く浅い水面を見つけると、まず偵察隊のように少数の白鳥が着水すること、そして、周辺に餌もあり安全だとわかると、夜間でも大群がやってくるようになること、水鳥の渡来地の周囲には、獵師が待ちかまえていて罾をしかけること。

これらはいまでも万国共通の実態であるからである。

また、罾に掛かった白鳥を見て逃げ去る白鳥がいる半面、戻ってきて、その白鳥を見守るようにそこを離れようとはしない少数の白鳥が必ず存在すること、等々、日ごろ白鳥を観察していると認めざるを得ない、人間と白鳥との相関関係をふまえて書いていると思われるからである。

人間の狩猟本能を前提にして、白鳥の行動態様を擬人化してからませ、すべてを征服したいと思う人間の王の考え方と、白鳥の王の無為の哲学から発する言動が、ぶつかり合いわたり合うというお話で、示唆と気迫に満ちている。

さて、その後のお話に戻ろう。

「スムカの申し出に心を動かされた獵師は、白鳥の王を罾からはずしてやった。ス

ムカは歓喜して『仲間の白鳥たちも喜んでいるでしょう。しかし、貴方がたのお骨折りが無駄にならないよう、私たち二羽の白鳥を担ぎ台に載せてベナレスの王様に見せてください』といったので、獵師は、そのとおり二羽を持ち帰って王様の前に差し出した。

白鳥の王の威厳に満ちた姿に、ベナレスの王は獵師に問うた。

『このように縛られていない二羽の白鳥が、どうしてお前らの手に入ったのか』

獵師は、白鳥の将軍が、白鳥の王の身代わりとなりたいと申し出たいきさつについて話すと、ベナレスの王は、驚きとともに畏敬の念に動かされて、白鳥の王らに黄金の椅子を差し出し、それに座るように勧めるのだった。

白鳥の将軍スムカに、影のごとく伴われながら悠揚せまらざる白鳥の王の態度と、その話しぶりに、ベナレスのブラマダッダ王はすっかり感じ入った様子で『貴方がたとお話ししていると帝釈天と会話しているようで、魅力的で感銘深く、誠に喜ばしい限りです』と言って、白鳥の王らに対し最高の敬意を表し、合掌したという。

解き放された二羽の白鳥は、紺碧の秋空に舞い上がり、マーサナ湖の仲間たちのもとへ帰っていった。

スムカとは、釈尊(菩薩)に随伴して、常に愛情と尊敬を忘れなかった仏弟子の「阿難」のことを指すのだという。

四. 白鳥になった仏陀

“白鳥本生”の物語は白鳥の夫婦愛または同胞愛がもたらした寓話のひとつであろう。

白鳥の家族は通常、雌雄のカップルの間に幼鳥が二羽ないし五羽くらいの単位で行動している。この関係は、白鳥が集団の中に溶け込んでしまうと見分けがつけにくくなるが、その場所から移動しようとするとき再び明瞭となる。出発間際の白鳥家族は、鳴き交わし呼びかけ合い、みんなが集まったのを確かめてから一緒に飛び立とうとするからである。

越冬期も終わり近く、北上のシーズンを迎えると、病気になったり翼を傷めたりして飛び立てない白鳥が出てくる。飛べない白鳥には、その白鳥の回復を待つかのようにつき添い、居残ろうとする何羽かの家族が見られる。

しかし、季節は待ってくれない。北極圏へ戻ろうとする帰巢本能と、家族愛との板挟みになって苦しんでいた白鳥家族も、結局は傷ついた一羽を残したまま、その湖から飛び立つ。上空から別れを惜しむかのように「ココー、ココー、コウー、コウー」と呼びかけながら飛び続ける。残された一羽は、自由のきかない羽根をばたつかせながら「クエツ、クエツ」と悲しげに應えるばかり。広い湖に一羽だけ取り残された白鳥はうらさびしく哀れである。

翌朝、その孤独になった白鳥は、湖の片すみでポツンと浮かんでいる。折しも上空から、孤独の白鳥めがけて一羽の白鳥が舞い降りてきた。着水したとたんに、孤独だった白鳥が相手をめざして一直線に泳いでいき、その相手の胸に飛び込むように胸と

胸とを突き合わせた。

二羽の長い首の線がハートの形を描いた。この姿こそ白鳥の連れ合いの証しなのである。

このカップルは、湖畔のサクラの花が満開になる日まで連れ添っていたが、ついには一羽だけが飛び立った。この白鳥は、残された白鳥の上空を、名残惜しむかのように何回も何回も旋回しながら、北へ北へと遠ざかっていった。

白鳥渡来地の近辺に生活していると、これに似た切ない情景を目にすることは稀(まれ)ではなく、その都度、地元でも話題となる。

そんなことを思い出しながら、私はいま、インドの仏教遺跡を探訪している。アジャンター石窟の第一窟から第二窟、第三窟と回り、そこに描かれている白鳥の壁画と対峙している。

碁盤目状に区切られた一平方メートル程度のコーナーごとに、数え切れないほどの白鳥の絵が見受けられる。

蓮華の花の中に一羽だけを描いたもの、二羽のカップルを思わせるもの、長い首が三つもある不思議な形をした白鳥もあり、と多様であるが、半径二メートルもある法輪の周囲に、複数の白鳥が円陣を組む絵柄は見事である。

壁画から見る体型は、総じてコハクチョウの特徴を示している。想像するに、古代インドでは、主としてコハクチョウが渡来していたものと思われる。

白鳥の壁画をじっくりと観(み)てきて、私が最も惹きつけられた絵柄は、蓮華の花の咲く水面に、向き合いながら佇む白鳥のカップルの構図であった。私は直感した。「これは毘に掛かった白鳥の王と、将軍のスムカだ！」

堂々と、正面を見据える大型の白鳥こそ「釈尊」の前生のお姿であり、付き添っている一羽はスムカ、すなわち仏弟子の「阿難」である。

壁画の中の白鳥の絵の謎が、一気に解けた思いがした。

法輪を円周する白鳥は、白鳥の王につき従う白鳥群であり、同時にまた、仏教の広まりとともに西域に飛び、ギジル千仏洞の壁画に張りついた「太陽をめぐる四羽の白鳥」だったのである。

ここに至って私は、アジャンターの壁画にもう一度じっくり向き合おうと思い立った。

はじめに、末端の第二十六窟まで行きつき、側廊の左側に不思議な笑みをたたえて横たわる、インド最大といわれる涅槃像に対面した。その奥壁には、仏陀(シッダールタ)を誘惑しようとする魔王と、その娘たちの群像が浮き彫りにされた「降魔成道」の仏伝像が見られる。洞窟の中央に屹立するストウパの正面に回り、合掌してから、いったん洞窟の外に出る。

アジャンター石窟群の外壁に添う回廊は、おおむね南向きにあり、直射する太陽が照りつけてまぶしい。岩盤を刻んだ階段を上り下りして第一窟の正面まで戻った。

扉を押して内陣に入ると、暗さに一瞬どまどろが、弱いながらも非発熱繊維を利用したオプティックファイバーと呼ばれる照明設備もあり、すぐに目が慣れてきて、巨

大な石柱群とともに多様な浮き彫りや壁画が見えてくる。広さは奥行きと横幅ともに二十メートル前後、天井までの高さは七メートル程度か。西域のキジル千仏洞や敦煌石窟の遺構よりも一回り大型で堂々としている。

正面左右回廊に、彩色豊かな金剛手菩薩と蓮華手菩薩像が描かれている。この画像は、法隆寺金堂内の菩薩像の手本と見なされていて、広く仏教徒に知られている。正面奥廊には釈迦三尊像が納まり、その左右上方には男女一對の飛天像が幾組も見られる。さすがインド、両性具備(中性)の飛天ではない。

周囲の壁面には、活動する人物や動物などが彩色鮮やかに描かれたジャータカ(本生譚)の世界が繰り広げられていて、目もくらむばかりに圧倒的な情景である。

本生譚の物語は三百二十余話もあるので、そのすべてが表現されているわけではないが、ここでは、シビ本生、シャンカパーラ本生、マハージャナカ本生、カリヤーナカーリン本生、チャパンカ本生、プラパーサ本生等々が見られる。幾世代にわたる画工たちの強い意志と、豊かな感受性が凝集された仏教美術の宝庫である。

王子としての釈迦が、妻子との恩愛を絶ち、出家し、修行して仏陀となったという仏伝から取り入れた「出家する王子」や「王宮で灌頂する王子」の絵図も見られる。

アジャンターの石窟寺院の壁画には、釈迦の生きざまに共鳴した、生身の人間の情念が傾注されている。仏教に帰依し、輪廻転生の思想を反映するジャータカのドラマに突き動かされた芸術家たちの創造の衝動が、岩盤のキャンバスの上に営々と表現されてきたのである。

五. 白鳥文化の大樹

季節の風に乗って、雄大な渡りを繰り返す不思議な白い巨鳥。周期を違えず立ち現われる白い大鳥の記憶は、東西の民族が共有していた。白鳥が空に舞う天使のように、白い羽根を青空にきらめかして飛翔するとき、人間の心もまた無限に上昇し、想像の世界を広げていったのであろう。

しかし、一本の樹の幹から枝が分かれるように、すべての事象は歴史の中で分離し成長していく。東側に向けて伸びる枝と西側へ伸びる枝は、違う景色を見ながら成長し、枝ぶりにも個性が現われてくる。そして、それぞれの枝に見事な花を咲かせる。

夜空に輝く白鳥座(ギグヌス)に代表される西洋の白鳥文化は、ギリシャの空を飛んでいる。

ギリシャ神話では、大神のゼウスが白鳥に化身して、スパルタ王妃のレダを犯し、双生児のポルックスとカストルを産ませたという物語だが、男女の立場が逆とはいえ、ここにも白鳥に化身する、子を産ませる(あるいは子を産み育てる)そして再び白鳥となって天に戻るという相似のエッセンスが生きている。

ところが、こギリシャ神話は、これだけではおさまらず、もうひとつ戦いの要素をかかえていた。このゼウスと呼ばれる大神は実は何人もいて、その中の一人のゼウスの行動を追うと、最後にはヘラクレスと呼ばれる地上の勇士と一騎討ちのすえ敗れ、戦死してしまっただけという。このときにゼウスは白鳥に化身して、天の白鳥座になっ

たのだとされている。なにやら日本神話のヤマトタケルの白鳥伝説と重なるものがある。これは、六世紀のころ、漢字の舟に揺られながら日本にもたらされた伝説を、古事記や日本書紀に取り入れたものなのだろう。

一方の東洋では、白鳥の湖に咲き誇る蓮華の花がインド教(ヒンドゥー)のシンボルとなり、蓮と白鳥はのちに仏教にも取り入れられて仏陀の白鳥伝説を生んだ。

古代インドで成立した本生譚(ジャータカ)中の「仏陀の生前の姿は白鳥の大王であった」というテーマは、白鳥文化を語る場合の支柱の一本であり、その影響力は深く、広いものがある。

本生譚には「黄金の鵝鳥(がちょう)」という物語もあるが、これは慈悲の精神にあふれた「白鳥本生」の類型的物語であると見なされている。ところが、この寓話の筋立ては、ほぼ同時代にギリシャで成立したイソップ物語の中の「黄金の卵を抱えた鵝鳥」のストーリーにそっくりだといわれている。この場合、どちらの成立年代が早いか遅いかの蓋然性を追求することもできようが、むしろ、東西の文明が交流した歴史の道程が両者の思考を近づけ、兄弟のような寓話を成立させたとみるべきであろう。

さて、アジャンター石窟寺院の天井に描かれた白鳥は、その後どこまで飛んだのであろうか。

六世紀のころ、ガンダーラ仏教美術の故郷のひとつであるバーミヤン(アフガニスタン)の大伽藍には、白鳥の絵姿も見られたと思われるが、いまや異教徒によって多くの遺跡が破壊され、見るべきものは残り少ない。ただ、最近改めて再開された、発掘プロジェクトの成果を見守る必要があるだろう。同時代に中国の西域に降りてきた白鳥は少数であるが生き残り、天山南路のオアシスに立地する仏教石窟の中に、着実に足跡を印していた。それがキジル千仏洞やクムトゥラ、クズル・ガハ千仏洞等の白鳥壁画である。

また、敦煌莫高窟の第二百五十七窟北壁(北魏時代)に描かれた「説法する釈迦牟尼と六羽の白鳥」にも、その痕跡を見る。この六羽の白鳥は、釈迦の六人の弟子と見ることができ、同時に釈尊と一心同体とみなされている白鳥が、六道六趣といわれる衆生輪廻の世界に生まれ変わり、連綿として生きついできたのだという仏画的表現と思われる。

加えて、この白鳥壁画の意味について、敦煌石窟の現地ガイドの説明によれば「釈迦が弟子の迦葉とともに五百羽の白鳥を引き連れているという故事に基づいて、その代表としての六羽が描かれている」のだという。

本生譚の故事に由来する白鳥の大王は、当初白鳥の大集団を引き連れていたが、次第に分散して小群となり、末端はシルクロードの天山南路のムザルト河に沿う仏教遺跡群から西域南道東端の敦煌石窟あたりまで飛んできたということになる。しかし、日本より近い位置にある山西省北方に造成された雲崗石窟(四六〇～)や竜門石窟(四九〇～)までは届かなかっただろうか。

北魏時代(三八六)から南北朝時代(四二〇～)を経て唐(六一八～)の時代にかけては、なぜか白鳥に代わって飛天が大活躍をする。各地に数ある千仏洞の大千世界の千

で、羽衣をなびかせた天女となって乱舞し全盛を謳歌している。一方、白鳥は、この飛天芸術の中に埋没し姿が見えなくなっていたのである。あたかも羽衣を取り戻した伝説の白鳥が天女に立ち返り、天に昇っていったかのように。

なぜ白鳥の絵姿は、仏教美術として日本に渡ることができ得なかったのだろうか。それは雲崗石窟を造成した北魏朝時代の人々が、砂漠性の風土に住み、夏は乾燥が激しく、冬はぐっと冷え込み、強風が吹きつけるという気象の特殊性にさらされて、実際の白鳥の姿を見る機会が少なかったことが影響していると思われる。

一方、リグ・ヴェーダの叙事詩から抜け出したアプサラスは、その変幻性を自在に行使して、容易に仏教の天竜八部衆に乗り移り天人の眷族となった。また夫のガンダルヴァは乾闥婆に、キンナラは緊那羅となり、それぞれ帝釈天の楽人となりえた。

天人となったアプサラスは、西域のアオシスを遊行しながら絹布をまとい、ファッションセンスあふれる飛天となり天女となって、そのままの艶(あで)姿で海原を越えて日本に到達した。

このアプサラスは、同時に文明の十字路から西方の国々に入り込み、翼をもつキューピットやエンゼルに変幻して、西洋文明に習合し、いまに生きている。

バレエの「白鳥の湖」のダンサーのトーシューズの揃い踏み音は、西域の胡旋女が円盤の上で連続回転するときに発する激しい靴音と共鳴する。また、カンボジアのアンコールワット(世界遺産)に残るアプサラスの群像は、民族舞踊のアプサラダンスとして伝承され、冠を載せた舞姫が身振り手振りの優雅さを競っているが、この姿を、天冠を載せて優雅に舞う日本の「羽衣」の仕手舞と重ねてみると、深いところで共通の表情を読みとることができる。これらの伝統芸能が表現するものこそ「白鳥文化」が育んだ大輪の花々なのである。

「羽衣伝説の白鳥」の血脈は、文明の大樹の地下茎を通じ、古代インドのリグ・ヴェーダに見るアプサラス等の飛天と、ジャータカに見る白鳥の大王に直結している。

いずれにしても、その両方を束ねて東方に伝えたのは、飛天を伴った釈尊の仏教であり、天かける大日如来の巨大な輿車の法輪を回し続け、舵を引っ張り続けた白鳥の大群であったという心象が膨らむ。

釈迦の生まれ故郷のルンビニ地方(ネパール)は、ヒマラヤの雪解け水に涵養された豊潤な農耕社会であり、古来、白鳥にとっても渡来に適した環境であった、この土地柄が、仏教と白鳥との深い因縁を生み出したのであろう。

本生譚の中で「釈尊と白鳥の王の一体観」を表出し、慈悲に満ちた「白鳥物語」を成立させたのも、この風土のなせるわざである。

同時に、この仏教の聖地から飛び立ち舞い上がり、大陸の各地へと雄渾な渡りを繰り返してやまなかった白鳥たちの、躍動する翼が「羽衣天説の白鳥」という伝承を結実させたことをいささかも疑わぬものである。

六. 本来仏教と深いつながり

玄奘三蔵をさかのぼること二百余年、鳩摩羅什は、捕らわれの身の長安で三十五部

三百巻に及ぶ長大な經典を漢字に翻訳した。よく知られているは法華經、阿弥陀經、維摩經などである。

羅什の翻訳した「仏説阿弥陀經」の經典のなかに「白鵠」という字句が見られる。これは白鳥のことを指している。

阿弥陀經には極樂浄土の世界が華麗な理想郷として描かれ、仏の功德が説かれている。この天上の樂土には、金、銀、瑠璃、玻璃などの宝石で飾られた池があり、大輪の蓮華の花が芳香を放っている。広い庭園には、白鵠(白鳥)、孔雀(くじゃく)、鸚鵡(おうむ)、舍利鳥(秋露・百舌鳥)、迦陵頻伽(妙音鳥)、共命鳥(ぐみょうちょう=命々鳥)などが優雅な声で鳴き交わしている。

この曼荼羅のパラダイスの中で、第一番に白鳥を挙げている意味を敷衍すれば、たとえば釈迦の前生物語のなかに「白鳥の王様と忠誠な従者の物語」があること、また「大日經疏」(密教書)にも「月天(月光菩薩)は、白鳥の車に乗って二十七宿、十二宮を従えている」とあるなど、白鳥が元來仏教と深いつながりがあったことを示す証拠を見いだすであろう。

この經典を翻訳した羅什は、実際の白鳥(白鵠)を目にしたことがあったであろうか。いまとなれば、その可否を判断することは難しいのだが、白鳥の存在を知っていたであろうことは想像できる。それは羅什が学び成長したといわれる西北インド地方から天山南路方面には、白鳥の渡来地が点在していたことを示す壁画や文献が多々見いだされるからである。

しかし、最も古い白鳥の壁画を残すインド西部のアジャンター石窟で、多様な姿態を見せる白鳥のモデルは、どこに求めたらよいのであろう。あえて推測すれば、往時のインダス河やガンジス河流域の湖沼群などに、白鳥渡来地が存在し、当時の画工たちがそれを見ていたであろうということなのだが、謎の部分は多い。

現在、白鳥のことを知っているインド人は少ない。これは、練達のガイドの場合でも同様で、仏跡の壁画に見られる白鳥については、白鳥(Swan)だということは知っていても「この白鳥は、いまインドのどの地方に渡来していますか」と聞くと、とたんに答えられなくなる。仏画の白鳥は、迦陵頻伽と同様、空想上の鳥だと思っているふしがある。

デリーの書店で、インドの動物専門書を開いてみても、白鳥は出てこないのであるから彼らを責めることはできない。このように鳥類行動学に関する情報の少ないインドにおいてハクチョウ類の行動を追うことは、仏典の中の白鳥を追うよりも複雑で、広範な視野が求められる。

私は、最新版(二〇〇〇年刊)の『インドの重要な鳥類保護区域』(Important Bird Area in India)という専門書を購入し、インドのハクチョウ類について調べてみた。この本では、インドの鳥類学者やバードウォッチャーなど一千人以上が、過去五年間に収集したデータをもとに、合計四百六十五保護区域の調査結果を一千三百ページにわたり詳しく紹介している。現在のインドの鳥類相を知る第一級の資料なのである。

インドの人口は十億を超えている。その国土も広大で、ゾウやトラをはじめとして

動物相も多彩である。インド洋を含む熱帯地方から、ヒマラヤ山脈の寒冷地帯まで、気候風土も落差が大きい。インド洋にそそぐインダス(パキスタン)、ガンジスという二つの大河があり、その支流の河川や湖沼も多く、季節の変化とともに鳥類相も多種多様である。ペリカン、フラミンゴ、トキ、ツル、サギ、ガン(インドガン)類など、白い羽根の色が目立つ渡り鳥も多く見られる。

しかし、手にした鳥類専門のこの大冊には、不思議なことにハクチョウ類に関する記述が一行もなかった。

あのアジャンター石窟の蓮の花が咲き乱れる池に群れていた白鳥は、どこに行ってしまったのだろうか。インド地方が、地球温暖化の影響で、白鳥が適応できる風土でなくなってしまったのだろうか。インドの白鳥を放逐してしまったものは何か。疑問は深まる一方だが解明の手立ては見つからない。

七. 銃と伝染病

インドに渡来していたはずの白鳥が見られなくなったのは、格別古い時代ではないと思われる。

一九七〇年以前に、ソ連邦(現ロシア)科学アカデミーによって編集された『ソ連邦鳥類事典』には、インドのコハクチョウ渡来地が記されている。ガンジス河下流地帯に一カ所である。

この辞典には、さらにユーラシア大陸一帯のハクチョウ類の渡来地の南限が示されていて、当時のハクチョウ類の行動範囲を知るための貴重な資料となっている。それは、ベトナムのメコン河口地帯やタイランド湾沿岸およびベンガル湾にそそぐガンジス川河口地帯、さらにはアラビア海にそそぐインダス河流域からペルシャ湾に面するアラブ首長国連邦海岸にまで及ぶ。

いずれにしても、一九七〇年代以前のインドには、確かに白い羽根のハクチョウ類が羽ばたいていたのである。

これらのインドの白鳥は、なぜいなくなってしまったのであろう。

かつてわが国においても、明治期後半(一九〇〇年)から昭和中期(一九五〇年)ころまでの約半世紀にわたり、北海道を除く本州に、白鳥が一羽も見られなかった時代がある。二〇〇六年現在、全国に六万羽以上が渡来している状態からは想像もつかないが、この事実には次のような背景があった。

明治時代に急速に発達した猟銃の普及にともなって、白鳥が大量に撃ち落とされ、その数が激減したという事実がある。これを憂慮した時の政府は、大正十四年(一九二五)、農林省令第二十四号狩猟施行規則改正によって白鳥を保護鳥に指定し、ようやく滅亡の危機を脱したが、その後再び本州に白鳥が姿を見せ始めたのは、日本が第二次世界大戦に敗れて、一切の銃器が取り上げられたのちの昭和二十年(一九四五)以降のことであった。約五十年間という白鳥不在の歳月が流れていたことになる。

インドの場合にも類似の事実を見ることができる。この国は、一九五〇年に独立するまで約二百年間にわたり、イギリスの植民地支配を受けていたが、このころイギリ

ス人をはじめとする多数の外国人によって持ち込まれた銃器による狩猟圧によって、まずゾウ、ライオン、トラなどが大量に撃ち殺され、急激に数を減じていった。鳥類も同様、ハクチョウ類やガン類などの大型の渡り鳥が狙われ、大量に撃ち落されたのである。

動物のとの共生を信条とするヒンドゥー教徒が大多数を占めるインドにあって、人々は、このありさまを見ながら何も手出しもできなかった。

一九四八年にガンジーが暗殺され、大きな犠牲をともなった抵抗運動の果てに、一九五〇年、イギリスからの独立を勝ち取ったインドは、さっそく動・植物の保護区域を順次拡大することに取り組んだ。この方針は着実に継続されて、二〇〇六年現在、五十二カ所に及ぶ国立公園の設置を始め、百九十一カ所の野生サンクチュアリ(鳥獣の聖域)の設置のほか、各州ごとに保護区を設定し、合計四百六十五カ所の多様な自然保護区を策定している。このなかには、ラムサール条約湿地となったチリカ(チルカ)湖なども含まれる。

インドの国土は広大である。インダス河最上流のジャンムカシミール山岳高地地方からインド洋を望むベンガル湾とアラビア海岸まで、山あり高原あり、川あり平野あり湖水ありと、自然条件に恵まれ、四季折々の気象に多様性がある、いつ白鳥が帰してもよい条件が整備されつつある。

昔、ペナレスのブラマダグダ王が造成したといわれる、マーサナ大湖に負けない環境があると知れば、仏陀の化身とみなされる白鳥の大王に引き連れられた、白鳥の大群が再びインドの大自然のなかに舞い降りる日が来るであろう。

インドの大地から白鳥が姿を消したその理由を、もうひとつの側面から明かすことはできなであろうか。

それは、この地方に過去の一定期間、鳥インフルエンザの感染による渡り鳥の大量死があったのではなかろうかという疑問が残るからである。

いまや、高病原性鳥インフルエンザ(H5N1型)は、家禽のみならず、人間をも侵すインフルエンザウイルスに変形したといわれ、世界保健機関(WHO)の脅威となり、国際的な対策も打ち出されている。

かつてアメリカの大西洋のワシントン市に近いチェサピーク海湾において、カナダ、アラスカ方面から渡ってきたアメリカコハクチョウが、シーズン中、一気に数万羽も斃死したという事件があったことを思い起こさずにはいられない。

近年も、中国の青海省や内モンゴルに渡ってきたオオハクチョウやインドガンが、鳥インフルエンザに感染して多数死亡したという情報もあり、憂慮すべき状況下にあるが、近い将来、インドに再び白鳥が渡来する好運の日が訪れるとするならば、前車の轍を踏まないように十分な対策を講じることが望まれる。

ハクチョウ類の行動学に始まった私の白鳥学の遍歴は、四十年を超えた。歳を重ねるにつれ、白鳥にも悲喜こもごもの文化史があり、それが仏教に結びついていることに気付かされて、はふばると天山山脈の白鳥繁殖地を探訪し、キジル千仏洞の白鳥壁画等々を訪ね歩いてきた。

こうして、シルクロードの難路を行きつ戻りつ、ここまでやってきたわけであるが、いまにしてわずかに救いの光が見える。インドに見られなくなっているハクチョウ類が、釈尊の生誕の地として知られるネパールに、少数だた飛来するという喜ばしい情報があるからである。

ネパールでは、ヒマラヤ越えをするアネハヅルの大群の映像がよく知られているが、白鳥の場合にも、少群とはいえ同様の行動が見られるらしい。最近のこどだが、チベット高原の湖沼群からカルナリ川に沿って西ネパールへと南下してくる白鳥の少群の姿があるという貴重な情報もたらされた。

このチベットの高地には、ヒンドゥー教とラマ教(刺麻は即ち白鳥、の伝承がある)の聖地とされるカイラス山(標高約六千七百m)があり、その南麓には、マパム・ユムツォ(マナサ・ロワール湖・水面標高約四千六百m)などの白鳥渡来地が存在し、白鳥の姿が巡礼の眼にとまることがあるという。

釈尊(仏陀)と白鳥の因縁は、このような背景のなかで生まれたのであろう。ヒマラヤ連峰の雄大な景観をバックに、白鳥たちが飛翔する英姿を眼の当たりにして、いにしえびとの魂も揺さぶられたに相違ない。

白鳥を追い求めてやまない一人の写真家として、血の騒ぐ思いがある。